経済学がもっと面白くなる〈情報＆メッセージ!〉

北海学園大学 経済学部報
【エコン】
2010.夏・秋号

econ.

No.22

フェアトレードの可能性を知る、考える、体験する。

特集 世界とつながる「フェアトレード」

●特別講演会「フェアトレードと地域経済の可能性」
●フェアトレードフェスタ in さっぽろ　●フェアトレードABC

News 1	NIE出前講義／労働経済論特別講演会「リアルに学ぼう団結『剣』はこう使う」
	1部ゼミ対抗ソフトボール大会／2部基礎ゼミドッジビー大会
interview	OB訪問－働きマン❺札幌市職員 石垣まりやさん
連載企画	私の履歴書 歌代崇史講師
News 2	就職情報／保護者懇談会／コープさっぽろ寄附講座Ⅳ
	特別講演会「社会的排除の克服のためのコミュニティ政策」

ノクシカタ刺繍のクッションカバー（バングラデシュ人民共和国伝統工芸）

「ノクシカタ」はベンガル地方（インド東部からバングラデシュ一帯）に古くから伝わる刺し子を施した刺繍のこと。独立戦争や欧米社会の影響などによって一時は衰退しかけましたが、バングラデシュ国内のNGOによって女性の自立の手段として復興に成功しました。日本を含めアジア各地には使い古された布に新たな命を吹き込む刺し子が広く見受けられますが、ノクシカタは単なる布の再利用にとどまらず、針と糸の織りなす芸術的工芸品として評価を得ており、またフェアトレードの製品としてもよく知られています。（関連記事は2～3ページ）
参照：「シャプラニール＝市民による海外協力の会」リーフレットより

ノクシカタ刺繍の製作風景
写真撮影：三田村真希さん

特集 世界とつながる「フェアトレード」

今年で4回目になる「フェアトレードフェスタinさっぽろ」が6月に大通公園で開催されました。これに連動するイベントがさまざまに行われました。本学でも講演会が開催され、フェアトレード（FT）を広める活動の学生サークル（HFTU）も発足しました。フェアトレードとは何か。世界とつながるフェアトレード。その仕組みや本学講演会、学生の取り組みなどを紹介します。

［平成22年6月4日］特別講演会（北海学園大学開発研究所主催）

「フェアトレードと地域経済の可能性」

佐藤 寛氏●日本貿易振興機構（JETRO）アジア経済研究所

5月8日は「世界フェアトレードデー」で、世界70カ国・350のフェアトレードに関わる組織・生産者団体・ショップなどが一斉にフェアトレードをアピールする日。北海道でも5月から6月にかけて、フェアトレードに関する多くのイベントが行われました。これに連動するかたちで、6月4日には日本貿易振興機構（JETRO）アジア経済研究所佐藤寛氏をお招きし「フェアトレードと地域経済の可能性」と題する講演会が行われました。

佐藤氏はCSR（企業の社会的責任）やBOP（経済ピラミッド構造の底辺貧困層）ビジネスなどに造詣が深く、またイエメンなど様々な途上国の開発問題に関わってきました。多様化する開発援助プログラムの中から「先進国の我々と途上国をつなぐ新しいつながりとはどのようにあるべきか」「先進国の利害だけではなく貧しい生産者の生産活動の取り分をもう少し多くし、作った人のことまでを考える消費行動としてフェアトレードが大事ではないか」と新しい開発とフェアトレードの可能性について語っていただきました。

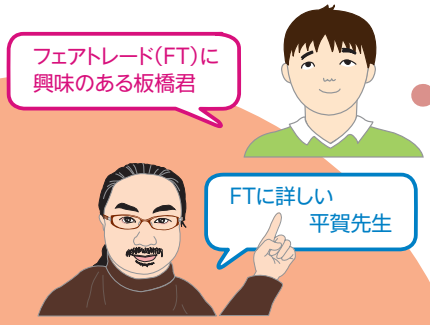
佐藤氏の講演に続き、フェアトレードが専門の神戸国際大学経済学部講師大野敦氏、途上国が多く存在するラテンアメリカ経済が専門の本学平野研准教授が加わりディスカッションが行われました。

1日の所得が「5ドル以下」で暮らす貧困層は約40億人ともいわれ、世界的な所得・生活格差が生じています。また、経済格差は地球規模で進行する環境問題にも多くの影響を及ぼしています。決して他人ごとではなく、いかに問題意識を共有できるのか、同乗する「地球号」に不公平をなくしていくことが大切であると3人の方々から語られました。日本ではまだまだ認知度の低いフェアトレードですが、フェアトレードの持つ可能性は新しく、大きいと感じる講演会でした。

本学平野研先生がフェアトレードについて語った。

フェアトレード商品の認証マーク
世界市場にFT商品を広めるために認証制度が導入されているが、非認証のFT商品も1割ほどあり、そのFT商品としての優劣はない。

本学フェアトレードサークル、HFTUの皆さん。左から経済学研究科院生大山翔太さん、経済学部3年生の吉崎涼太さん、三田村真希さん、下村渉さん。北海学園生協では、彼らの働きかけにより「マウベシ珈琲」などのフェアトレード商品が販売されている。



フェアトレードABC

コーヒーが好きな板橋君は、よく行く喫茶店で見かけたフェアトレード（FT）コーヒーについて、フェアトレードをゼミテーマにしている平賀先生に聞きました。

板橋君（以下、板橋）：先日、カフェで「フェアトレード」（以下、FT）のコーヒーを見かけました。

平賀先生（以下、平賀）：大学入試センター試験の英語問題で取り上げられたり、大型スーパーや有名コーヒー店でも取り扱うところが増えてきて、FTの認知度も上がってきてるね。

板橋：FT商品と普通の商品って何が違うんですか？

平賀：一つは、FT商品には不当な低賃金労働や児童労働が含まれていない、ということだね。普通の商品の中にはそんな不当さが入り込んでいてもわかりにくいよね。とくに途上国で行われる労働にはそういう不当さが含まれている場合が多いから、不当労働ではなく“フェア”な生産の商品を取り扱う、というのがFTだね。

板橋：途上国の労働にはそんなに不当労働が含まれているものなんですか？

平賀：今回のサッカー・ワールドカップ、スペインが優勝したけど、世界のサッカーボールの75%がパキスタンで生産されているって知ってた？

板橋：へー、そうなんですか。

平賀：98年の仏ワールドカップではパキスタンのサッカーボール業界での児童労働が問題となったんだ。学校にも通えず、長時間・低賃金

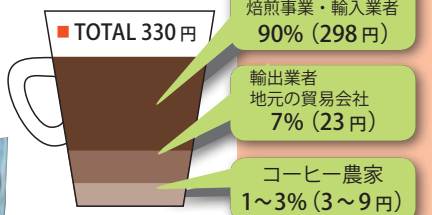
フェアトレード【Fair Trade】とは？

1960年代に欧州で始まった、コーヒーなどの作物や伝統的な技術で生産された途上国の産品を、生産者から直接、適正な価格で購入し、先進国市場で販売する公平貿易/公正取引の仕組みをいう。生産現場での貧困や人権侵害、児童労働などの問題を日常の消費行動から解決しようというこの試みは、世界中に広がりを見せている。

FTは世界共通、インドネシアの人たちも参加。

フェアトレードの代表的産品のコーヒー（写真=左上、北海道で商品化されている「マウベシ珈琲」）やバナナの他にも紅茶・スパイス・衣料品、途上国の子供たちが作ったストラップなど多彩なフェアトレード商品が集まった。

コーヒーを例にしたアンフェアな取引の構図



［佐藤寛氏特別講演会資料より］

北海学園大学生協でも販売されている缶コーヒーは再生可能な紙缶だ。

2010.6.26・6.27

新しいデザインを取り入れた雑貨も豊富だが、伝統的な技術や模様の多いのがFTの特徴。

フェアトレード北海道の事務局でもある札幌市内のフェアトレードショップ「EARTH COVER アースカバー」店内と代表の千徳あす香さん。

フェアトレードを語るコーナーで、熱心に聞き入る来場者。

本誌表紙「ノクシカタ刺繍」のバングラデシュの農村での製作風景。本学FTサークルHFTUの三田村真希さんが現地で撮影したもの。表紙のクッションカバーも三田村さんが現地で購入したもの。

で働く15才以下の子どもたちが作ったサッカーボールによって支えられるサッカー業界、その頂点としてのワールドカップがあった。けれど、そこからワールドカップでのFTボール使用を目指す運動が始まったんだよ。FTでは、公正な労働条件で作られた商品という基準を設けて、そういう商品を拡大していこうというものなんだ。

板橋：ボランティアや開発援助とは違うんですか？

平賀：ハイチ大地震の現場で公正な労働条件といわれてもピンとこないでしょ？ そこでは救援としてのボランティアが求められるよね。生産条件として巨大な発電所が必要だとしても民間ではどうしようもない。だから政府による開発援助が必要となる。それぞれに役割が違う国際貢献があるよね。

板橋：じゃあ、FT活動って何をするんですか？

平賀：FTはトレードっていうくらいだから、ビジネスを通じて途上国での公正な生産の自立化を目指すんだよ。一時的な支援じゃなく、自分たちで世界に通用する商品を作り、それを売った利益で新たな生産をしていく。そんな自立した生産をサポートしていくのがFTなんだ。

板橋：う～ん。ボランティアとの違いがよくわからないなあ。

平賀：FT団体は途上国の商品を先進国で販売するけれど、そこから活動資金を得て、途上国労働の現状やFTを知ってもらう広報活動を行い、売り上げの拡大を目指していくんだ。君がFTコーヒーを見たカフェにしてもボランティアじゃないだろう？

板橋：そういわれれば、そうですね。

平賀：FT活動は売り買いという日常の行動を、世界とのつながりを考える機会にして、同時に公正な生産を広げていく活動なんだね。だから、生産者、流通業者、消費者どんな立場でも参加

［次ページにつづく］

［平成 22 年 5 月］1 部・2 部 基礎ゼミナール

北海道新聞社「NIE 出前講座」を受講

2010年5月、経済学部の教育改善の一環として、各基礎ゼミを対象に「新聞を活用した教育（NIE：Newspaper in Education）」が行われました。この企画は、北海道新聞社のNIE推進センターのご協力を得て実現したものです。

実際の講義では、その日の朝刊を題材にさまざまなメディアの特徴や新聞の読み方をご教示いただいたあと、新聞活用の重要性やその方法などについてご提案をいただきました。大変充実した、中身の濃い講義が北海道新聞社の講師の先生らにより展開されました。

ただ、1年生が対象ということもあり、「新聞」自体に慣れていない（まだ興味がない）学生もちらほら見受けられました。これを機会に新聞がより身近な存在になるとともに、経済学部におけるこのような企画・仕掛けを上手に利用してほしいと思います。

全1年生対象に出前講座

北海学園大経済学部

北海学園大経済学部1年生、470人全員を対象にした北海道新聞の出前講座が5月末、8回にわたって同大で開かれた。菅原時康経済部長、黒田正一NIE推進センター長らが講師となり、新聞の読み方などを説明した＝写真＝。

新聞記者を講師に招く大学は多いが、全1年生対象の出前講座は珍しい。教室では当日の新聞が配られ、紙面を開きながら、新聞のメディアとしての特長などを学び、経済面の記事と札幌市内版の記事を読み比べたり、見出し付けにも挑戦した。学生からは「新聞の作り手から直接、話を聞けて、見出しなどの付け方がわかった」などの感想があった。

同大の山田誠治教授は「活字と接する機会を増やすため、新聞を読む習慣を付けさせようと全1年生を対象とした。今後、継続的に新聞を読ませるにはどうしたらよいか、検討したい」という。

北海道新聞の掲載記事（2010.6.28）

［平成 22 年 7 月 16 日］「労働経済論」特別講演会

若者よ、剣を取って生き抜け！
―リアルに学ぼう団結「剣」はこう使う―

鈴木 一氏●札幌地域労組書記長

「労働経済論」（川村雅則准教授）の前期最終講義は、札幌地域労組書記長鈴木一氏を講師としてお招きし、現代の経済環境を反映した労働の職場環境と世界共通に認められている労働三権について、長きにわたって労働現場の現実を見つめてきた経験の中からお話しいただきました。

川村雅則准教授は「雇用・労働をめぐる問題は相変わらず深刻である。実際、卒業生から労働相談を受ける機会もボクは少なくない。『ブラック企業』。そんな言葉まではやっている、いやな時代だ。さあ、リアルに考えて欲しい。あなたは職場で困ったことに遭遇したら、どうする？（中略）そこで、対等に渡り合える、団結の『剣』を使おう。『剣』を使う。それは凶器の刃を振り回すこととは違う。また、狭い意味での自らの利益のためだけに『剣』を使うことを推奨しているのではない。職場をそして社会を変えるのはあなたであり、私であり、私たちだ。ボクは前期の最後の授業を使ってそのことをみんなと一緒に考えたい。」と問題提起をしました。

「団結の『剣』」とは、札幌地域労組が行った市民講座のタイトル「剣を取って生き抜け！ 団結『剣』の使いかた、教えます」から、憲法で保障された労働基本権の一つ、勤労者が労働組合を結成する団結権などのことを指しています。リーマンショック以降、急激に増えている雇用・労働問題の様相を「労働の百円ショップ化が進んでいる」と鈴木氏は言います。そのような競争原理に伴い悪化する労働条件にひとりで悩まず、孤立を選択せず、どんな職場でも生きていける環境を作っていくためにも、団結剣（権）が重要であると話されました。

本学では、就職のためのさまざまなキャリア教育が実施されていますが、川村准教授は、労働環境を考えるような職業教育も重要である、と締めくくりました。

できる活動なんだよ。

板橋：学生のボクが実際に参加するのって何だか難しそうです。

平賀：まずはFT商品を手にとってみるのがいいんじゃないかな。毎年６月に大通公園で開かれるフェアトレードフェスタや、北海学園では大学生協でも売ってるし、大学祭でも出店があるよ。

板橋：でもFT商品って高くないですか？

平賀：確かに割高感はあるよね。FT商品は基本的にオーガニック商品だから、生産コストが高い。でもそれは、FT商品が世界に通用にするために高付加価値を目指しているからなんだよね。大量生産の不公正な生産にはない特徴が必要だからね。そして、日本でFT商品はまだまだ小規模なので流通コストがかかってしまう。欧州ではFTは一般的なので、街角のスーパーにも大量のFT商品が並べられていて、比較的安い。日本で生活の全てをFT商品にするのは難しいよね。それでも、たまにFTコーヒーを買ってみたりするだけでも、ちょっとした国際貢献じゃないかな。

板橋：なんだか地産地消みたいですね。

平賀：そうだね。公正な生産・流通っていうのは何も途上国との貿易だけの話じゃない。国内でも同じような問題意識が高まってきている。国内では採れないチョコレートのような商品にもその意識が拡大していけば、まさに「国際産直」としてFTが注目されるだろうね。「FTと地産地消のコラボレーション」というのは、今後の北海道でのFT活動の課題の一つになっているんだよ。

板橋：カレーライスも道内産品だけじゃ出来ないですもんね。

平賀：お！ わかってきたね。FT商品でおいしいカレールーがあるんだよ。次のゼミコンパはFTカレーコンパにしよう！

板橋：カレーコンパって、聞いたことないですけど・・・

1部 ゼミ対抗ソフトボール大会

6月14日から17日にかけて、恒例のゼミナール（1部）対抗ソフトボール大会が、月寒公園坂下野球場で行われました。今年は、55のゼミが参加し、連日熱戦が繰り広げられました。優勝したのは「北倉ゼミI」。決勝戦では、打線がつながり、同じ北倉先生の「ゼミII」を相手に15対5で勝利し、みごと栄冠に輝きました。北倉ゼミＩの代表の方は、「優勝目指して練習しましたが、まさか本当に優勝できるとは思わず、とてもうれしいです。決勝は同じ先生のゼミが相手で、全員が一丸となって盛り上がれたのがよかったです。」と喜びを語ってくれました。また、惜しくも優勝を逃した他のゼミも、勝敗にかかわらず、ゼミ生どうしの親睦をより深められたのではないかと思います。

最後に、大会の運営をしてくれた、経済学部ゼミナール協議会の皆さん、ありがとうございました。

2部 基礎ゼミ ドッジビー大会

2010年6月28日、2部基礎ゼミの親睦を目的としたドッジビー大会が真駒内の北海道青少年会館で行われました。2年ぶりの開催です。

ドッジビーはドッジボールの代わりにウレタンのフリスビーを用いて行われます。性別や年齢に関係なく楽しめるのが特徴。10分間のゲームで内野に残った人数を得点としてカウントし、勝敗を争います。

最初に各ゼミがAグループ、Bグループに別れ、それぞれ総当たりで対戦。Aグループから越後ゼミ（1位）と浅妻ゼミ（2位）、Bグループから徐ゼミ（1位）と森下ゼミ（2位）が決勝トーナメントに駒を進めました。白熱した戦いのすえ、徐ゼミが優勝。上位チームには優勝賞金などが贈られました。

当日は、この時期の北海道・札幌とは思えないほどの暑さのなか、参加者はみな汗を流しました。さわやかな笑顔が印象的な「あつい」夏の思い出がまた1ページ増えました。

［OB訪問］

働きマン 5

“ありがとう”出会いがあったからこそ

市民ミュージカル出演の皆さんと（前列右から２人目が石垣さん）

石垣　まりやさん

いしがき　まりや

「大学では、やりたいことをやりつくしました」
そう語る石垣まりやさんの笑顔は、
数え切れない友人をはじめとする周囲の優しさに支えられていた。
石垣さんは現在、その気持ちに応えようと札幌市手稲区役所で仕事に励んでいる。

▲選挙推進のイメージキャラクターを持って

恩返し ＝ 市職員 ＝ 夢

石垣まりやさんは、卒業後に札幌市職員として手稲区役所 市民部総務企画課 選挙係に配属。ここで働きはじめてから３年目になる。

選挙の２ヵ月前から選挙期日までの期間は、忙しさと関わる人の多さとで、まるで“お祭りさわぎ”のようだという。選挙期間外も、選挙人名簿に関わる転出入届けの処理などで忙しく、公職選挙法の復習もかかせない。「１人１票の権利を守らなければならないので、大きな責任がともなう仕事ですね」。そう話す石垣さんの顔は充実感にあふれている。

石垣さんは、幼いころから両脚と右手に障がいをもっているため、車いすで生活している。ペンをもつのは左手だ。「ここにお母さんはいないものと思いなさい」。小学生のころ、登下校に付きそってくれていた母が、そう言って自立を促した。自分のことはできるだけ自分でやらなくては、という気持ちが強くなった。

それでも、できないことは誰かに頼まなくてはならない。ひたむきな石垣さんを家族や友人、恩師が支えてくれた。通りすがりの人が助けを申し出てくれることも多い。「誰とでも、すぐに仲良くなってしまうんですよ」。さまざまな人が積極的に支えてくれるのは、常に笑顔でオープンな石垣さんの人柄のせいだろう。日々のなかで、自然に“ありがとう”という言葉を大切にするようになる。しかし、心からの“ありがとう”でも受けた優しさを返しきれない、と石垣さんは思った。

「周囲の人には、直接恩返しをする機会があります。でも、道すがらドアを開けてくれた人には、その場で“ありがとう”と言うことしかできません。だから札幌市のために働いて、支えてくれた人すべてに恩返しをしたかったんです。市職員になることは、高校生のときから夢でした」

仲良し G'stAff（'08卒業アルバムより前列中央が石垣さん）

“友達 100 人つくろう計画”

障がいをもつ石垣さんには、もうひとつ夢があった。それは大学に入学すること。公務員合格者が多く、地下鉄駅直結で通いやすかったのが本学だった。「精いっぱい学んで、やりたいことをとことんやろう」と意気込んでいた石垣さん。しかし、キャンパス内には車いすで移動しづらい場所もある。大学生活を送るには多くの友人の助けが必要だと考え、“友達 100 人つくろう計画”を立てた。

「大学は、自分で行動すればなんでもできる場所なんですね。友達 100 人は半年くらいで達成、最後は 250 人を超えてしまいました」

大学には、いろいろな地域から、多くの個性豊かな若者が集まる。そして石垣さんに声をかけてくれる学生は、みんな優しかった。友人の協力を得て、学びに課外活動に、石垣さんは思い描いたことを次々と実現していく。

講義は最前列で聴講。ゼミでは、浅妻裕准教授のもとで４年間にわたり経済政策を学び、登別や函館まで泊まりがけの調査に行った。ゼミ長として多くの親睦イベントを企画したことも良い思い出だ。課外活動では、北海学園生協学生委員会の G'stAff（ジースタッフ）として活動した。なかでも、新入生向けのパソコン講習会の講師を１年生から務めたことが印象に残っているという。高校時代に取得した関連資格が役立った。

“やりたいこと”は学内に留まらない。高校時代の恩師を通じて市民ミュージカルに出演。ここで知り合った人たちの後押しを受け、樽前山登山も経験している。本学ワンダーフォーゲル部も応援に駆けつけ、みんなで車いすを担いで登ってくれた。

「大学って本当にいいところだと思いますよ。たくさんの友達のおかげで、本当に充実した大学生活でした。感謝の気持ちでいっぱいです」

“ありがとう”に込められた気持ち

恩返しをしたい人が増えた。そして 2007 年、札幌市職員採用試験への挑戦を迎える。この年、札幌市は障がい者枠を設けなかったため、一般採用枠をめざすことに。道のりはいっそう狭まった。

「大学２年生から予備校に通っていたので、一次筆記試験さえ通れば、その後の面接やプレゼンテーションなどには自信があったんです。どんどんアピールするぞって」

社会に恩返しをしたいという強い意志で、見事に難関を突破した。勉強、遊び。いまはそれに加えて仕事。常に全力投球の石垣さんは「手の抜き方を知らないだけですよ」とはにかむ。夢見た職場で働くいま、大学時代を次のように振り返る。

「人とのつながりの大切さを実感しました。楽しい思い出も、出会いがあったからこそですね。働く上でも、もっと人と関わっていきたいです」

受けた電話に親身に応えると、“ありがとう”と言われることがある。「それだけでも仕事をしていてよかったなぁって思うんです」。その一言にどれだけの気持ちが込められているか、石垣さんにはわかるのだろう。

profile

1985年　函館市生まれ
2004年　北海道札幌東商業高校卒
　　本学経済学部1部経済学科入学
2008年　本学部卒
　　札幌市職員として手稲区役所に配属

【私の履歴書】

歌代 崇史
うたしろ　たかし

経済学部講師
［日本語演習・日本語文章表現、日本事情］

経歴

中央大学文学部文学科英米文学専攻（文学学士）
Oklahoma City University大学院英語教育学（MA TESOL）
北海道大学大学院国際広報メディア研究科博士前期課程（国際広報メディア修士）
東京工業大学社会理工学研究科人間行動システム専攻博士後期課程 博士（学術）

職歴

北海道札幌西陵高等学校（英語）期限付き採用
北海道室蘭栄高等学校（英語）期限付き採用
台湾文藻外語学院日文系 専任講師

世界へのあこがれと“教える喜び”

ニセコ育ち、札幌へ

士別市で生まれましたが、父の転勤で、その後ニセコ町に移りました。私自身そこで人間形成された面が大きいですね。自然環境には凄く恵まれていて、魚釣り、ザリガニ採り、クワガタを採りに行ったり、そういうことばかりやっていました。小中学生の時は野球に熱中しましたね。私がいた学校のチームは弱かったんですけど、練習はよくしていたと思います。そこでの生活は楽しかったんですが、小さな町の息苦しさみたいなものも子供ながらに感じていたと思います。それと、大げさに言えば「もっと広い世界を見てみたい」というような思いがありました。それで、高校は札幌に進学しました。

英語教師を目指して

大学では英米文学を専攻しました。しかし、大変恥ずかしいことですが、入学してから自分はあまり文学に興味を持てないということに気付きました。何となく入学してしまったということです。しかし、その学科の中に英語学という英語を言語として科学的に研究する分野があり、それには関心を持ちました。ゼミのメンバーで読書会や勉強会をしましたね。その時、初めて学問に触れた気がして、何かを深く知ることの楽しさを知ったんだと思います。

勉強以外では旅行をよくしましたね。アメリカやイギリスに一人で。かっこいいものじゃないんですけど、一人旅って結構大変なんですね。何でも自分でやらなきゃならないし、寂しかったり、はじめて行くところは不安だったりしますよね。でも、それがいいんですね。「生きてるなー」っていう感じがするんです。

留学時代のアメリカ旅行

大学3年になり、自分の進路を真剣に考えるようになりました。その時は漠然と英語の教師になろうかと考えていました。それで、教育実習は大学付属の高校に行ったんですけどね。自分では結構上手く教えられるという変な自信があったんですけど、それが実際にやってみたら、全然上手くできなくて、そこで教えるというか授業をすることの難しさを痛感しました。しかし、それが良かったのかもしれませんね。難しいけどおもしろい。これを自分の仕事にしたいと思うようになりました。

英語教師から日本語教師へ

学部卒業後アメリカの大学院に進学することにしました。TESOL（Teaching English to Speakers of Other Languages)を専攻し、2年間コースワークと研究に励みました。勉強も頑張ったんですが、遊びの方でも頑張ってしまいました。アメリカってゴルフのプレイ料金がすごく安いんですよ。それでゴルフにはまってしまいまして、毎日、練習場に通うようになり、しまいには練習場に近いアパートに引っ越すくらい熱中してました。練習場といっても本物の芝の上で打てるんですね。それが気持ちよくて。

アメリカから帰り、北海道の高校で英語を教え始めました。アメリカで学んだことを活かした授業をしようなんて初めは考えていたんですけどね。現実はそんなに甘いものではありませんでした。授業を成立させるだけで精一杯の期間が結構続きました。どんな仕事もそうだと思うんですけど、その職についてからが勝負というか、日々努力をしなければ一人前にはなれないんだと思い知らされました。その時の経験と先輩の先生方からの助言が私の教師としての基礎になったと思っています。

高校で教えるということもやりがいがあり、大変楽しかったのですが、その当時私には、どうしてもやりたいことがありました。それが海外で働くということです。それと日本語教育にも関心があったため、アメリカで知り合った友人が多かった台湾に行くことにしました。私の周りの人は「台湾？ 就職が決まっているわけでもないのに、何を考えているんだ」みたいな感じでしたね。28歳の時だったので周りの人のそういう反応は当然かもしれないですよね。それに本当に派遣先が決まっているとか、どこかの学校と契約を済ませているというわけではなかったんですね。でも、貯金もあるし、1年だけ行ってみよう、そういう気持ちで台湾に渡りました。今考えたら無謀なんですけど、台湾に着いてから就職活動をしました。台湾中の大学に履歴書を送ったんです。そしたら、大変幸運なことに文藻外語学院という台湾の南部にある大学で職が決まり、日本語を教え始めました。

台湾の最初の印象は「なんてテキトーなんだろう」「なんて図々しいんだろう」というものでした。例えば、生活雑貨の店に買い物に行ったら、レジのおばちゃんが私に中国語で「あんた日本人？」「何歳？」「結婚してる？」「早く結婚しないとダメだよ」なんて言うんです。日本じゃありえないですよね。私も最初は驚きました。でも、そういうことにも徐々に慣れて、台湾のことを理解するにつれて、とても居心地の良い場所になったんですね。同時に日本的価値観を考え直すようになりました。それで、気が付いたら5年経ってました。そのころ、台湾では博士学位がない教員に対する風あたりが厳しくなっていました。そこで、教育と研究が将来も不安なく継続できる学位が必要だと考えて、日本に戻る決心をしました。

台湾文藻外語学院大学祭のイベントに参加、相撲の着ぐるみを着て（土俵内右側が歌代先生）

研究漬けの5年間

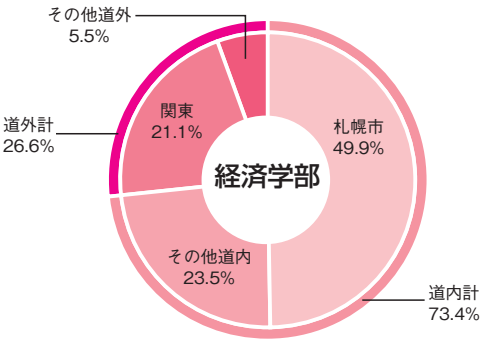
日本に戻って、北海道大学大学院博士前期課程に入り、国際広報メディア研究科で河合剛先生と出会いました。音声の専門家なんですが、河合先生の研究に対する姿勢、研究指導の方法に感銘を受けて入門しました。研究の仕方や業績の積み上げ方を大変丁寧に指導していただきました。私の研究に対する姿勢はこのときに形成されたと思ってます。その後、先生の強いすすめもあり、博士課程の後期は東京工業大学に進みました。東京に行く直前に結婚しまして、それから3年間は妻に働いてもらい、私は研究だけをやってました。貧乏でしたね。外食なんてほとんどしませんでした。もちろん妻には頭が上がりません。

学生のみなさんへ

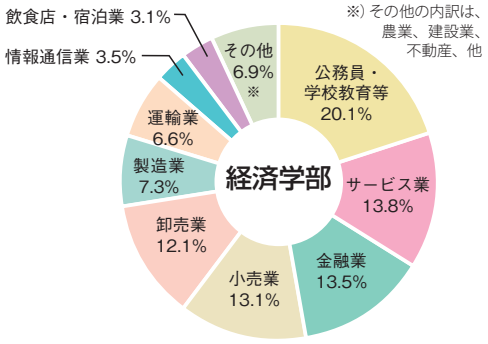
「自分て何なの？」これはとても難しい質問ですよね。一人で悶々と考えても答えは出ないと思います。出会いや体験が必要じゃないかと。大学にいる間に、いろいろな世界を見て、いろんな人に出会ってほしいですね。大学時代というのは、お金は無いけどそれが思いっきりできる期間だと思います。できるだけ多くの出会いと経験を積み重ねてほしいですね。そして、「自分て何なの？」に答えられる自分なりの語りを磨いてほしいと思います。（談）

就職情報

本社所在地別就職状況



業種別就職状況



過去3ヵ年の主な内定先

［経済学部のみ］　※公務員は合格者数

企業名	人数
北海道警察	38
生活協同組合コープさっぽろ	18
北洋銀行	18
ニトリ	15
北海道銀行	15
ムトウ	13
北海道旅客鉄道	13
国税専門官	10
国家公務員Ⅱ種	10
札幌市役所（行政）	10

公務員・教員登録状況

［平成21年度 卒業生・全学部］平成22年3月31日現在

名称	人数
国家公務員Ⅰ種	1
国家公務員Ⅱ種	55
国税専門官	31
労働基準監督官	3
裁判所事務官Ⅱ種	13
防衛庁Ⅱ種	2
海上保安学校	2
自衛隊幹部候補生	6

名称		人数
自衛隊一般曹候補生		10
北海道職員	上級※1	2
	中級※2	19
北海道	警察官※3	76
	婦人警察官	6
警察庁警察官	警察官	10
上記以外の警察官		2
札幌市職員	行政	37

名称		人数
札幌市職員	技術系※4	5
	学校事務	2
	消防吏員	12
その他市町村		87
その他公務員（上記分類以外）、他※5		12
国立大学等法人職員		126
公立学校教員		22
総計		541

※1）技術系のみ。
※2）教育・警察行政：16人と学校事務：3人の合計。
※3）1回目：62人と2回目：14人の合計。
※4）土木・建築・電子。
※5）大学別合格者公表のない試験（本人申告分を含む）。

就職部の主な支援活動

- ○就職相談・個別面談
- ○ガイダンス（民間・公務員）
- ○面接対策（模擬面接・面接セミナー）
- ○履歴書、エントリーシート添削セミナー
- ○就職講座（民間・公務員）
- ○就職講演会（民間）
- ○学内合同説明会
- ○業界研究会
- ○模擬試験（民間・公務員）
- ○YG性格検査、就職適正検査（R-CAP）の実施
- ○インターンシップの斡旋
- ○資格取得講座／公務員試験対策講座
- ○就職ポータルサイトの「ミナトコム」提供

［平成22年5月～6月］

平成22年度保護者懇談会開催報告

本学では、昨年度に引き続き札幌会場と帯広、旭川、函館会場において保護者懇談会を実施しました。当日は、休日にもかかわらず多数の保護者の方が参加されました。全体説明として、学生部担当者による学生生活の状況報告、就職部担当者による本学の就職状況報告を行いました。その後の希望者による個別相談では、事前にお寄せいただいたご質問に対応しました。

保護者の方々からは、日頃から心配している状況が解決でき、安心したとの声が寄せられ、大学側からの情報発信が強く求められていることが確認されました。

5月22日帯広会場

5月29日旭川会場

■開催状況

開催日	会場	会場名	組数
5月22日（土）	帯広	とかち館	19
5月29日（土）	旭川	北洋ホール	16
5月29日（土）	函館	函館北洋ビル	11
6月5日（土）	札幌	本学・豊平校舎	77

※全会場の個別面談希望組数は、合計38組

■主な質問事項

●教務事項

成績状況について？　卒業できるのか？　単位が取れないのですが？　ほか

●就職事項

公務員対策は？　具体的な就活とは？　就職動向は？　ほか

［平成22年7月10日］特別講演会

社会的排除の克服のためのコミュニティ政策
～大田広域市“虹プロジェクト”事例

安 成浩（アン ソンホ）氏●韓国大田大学校教授

経済学部の特別講演会として、本学との提携校である韓国・大田大学校の安成浩教授をお招きして、大田大学校の提起がきっかけとなり行われた韓国大田市における貧困階層密集地域の社会的排除の克服のための“虹プロジェクト”の取り組みと、その成果を講演していただきました。

大田市にある「永久賃貸アパート」のスラム化が地域崩壊を引き起こしていたことに対して、地方自治体、特に担当公務員たちの献身的活動、さまざまな社会団体とのパートナーシップ、マスコミの連携報道、そして住民自らも「虹の村を作り育てる会」という住民協議組織を立ち上げ、相互的なコミュニティ形成をはかったことにより地域再生の道筋がつけられました。

“虹プロジェクト”は地方自治体のベンチマーキングの事例として、国内外からの深い関心を呼び起こしています。大田大学校の提起が地域に果たした役割は大きく、大学と地域の関係がどのようにあるべきかの示唆に富むお話でした。

［平成22年4月～7月］

コープさっぽろ寄附講座Ⅳ「北海道の自立戦略を考える」

コープさっぽろ寄附講座は、2007年度からこれまで合計3回開催されています。いずれも、21世紀における北海道が、産業経済や地域社会の抱えている難題を打破し、自立する北海道の将来像をデザインする手だてを求めることを目的として、講座を行ってきました。厳しい社会経済状況が続く北海道の現状に躊躇することなく、その困難をチャンスに変えるための、21世紀における構想を大胆に提示するべく「北海道の自立戦略を考える」と題して13名の講師をお招きして開催されました。

第Ⅳ集も刊行予定の寄附講座講演録集Ⅰ～Ⅲ

講師一覧（敬称略）

4/23	常俊　優	㈶北海道科学技術総合振興センター副理事長・専務
4/13	原　勲	㈳北海道未来総合研究所理事長
5/7	菅井　貴子	気象キャスター・気象予報士
5/14	川崎　一彦	東海大学国際文化学部教授
5/21	林　光繁	㈱十勝毎日新聞社取締役会長・主筆
5/28	小野澤鉄彦	デンマーク農業理事会 駐日代表
6/4	飯田　哲也	環境エネルギー政策研究所所長
6/11	長沼　昭夫	㈱きのとや代表取締役
6/18	大社　啓二	㈱北海道日本ハムファイターズ代表取締役オーナー
6/25	柴田　明夫	丸紅経済研究所代表
7/2	松沢　幸一	キリンビール㈱代表取締役社長
7/9	數土　文夫	JFEホールディングス㈱相談役
7/16	李　濟民	小樽商科大学ビジネススクール教授

econ. No.22　2010. 夏・秋号
発行：北海学園大学経済学部　　制作：株式会社 ラボット
〒062-8605札幌市豊平区旭町4丁目1-40　TEL.011-841-1161（代表）FAX.011-824-7729
http://www.econ-hgu.jp　北海学園大学エコン 検索　E-mail：kyomu-za@econ.hokkai-s-u.ac.jp
PRINTED WITH SOY INK 大豆油インキで印刷しています　R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用